村上　志保(一橋大学社会学研究科博士課程)
shm@wna.jp

上海のプロテスタント教会－上海に展開する宗教空間の多様性

１．はじめに

（目的と対象）

本発表では、上海という特定の地域におけるプロテスタントの、特に改革・開放政策開始後の現在の状況を対象とする。特に中国の経済発展の中心地として、大きな社会変化（都市化、消費主義の拡大、国内外からの人口の流入、対外文化の流入など）の中にある上海において、プロテスタントの宗教活動が行われる空間のあり方の変化に焦点を当てる。

本発表では上海のプロテスタントにとっての宗教的空間の実態と意味に焦点を当てることによって、宗教的空間に対する権力側による制限と管理という形での支配の実態を提示したい。そして同時にそれは、支配のゆるやかな領域や、そして政治的に構成された空間とは異なる、一般市民によって形成され、理解されている空間構造をも明るみに出すことになる。更にその状況の中で中国人プロテスタントはどのように空間を経験し、そして自らの信仰をめぐる状況に関する認識を形成しているかを考えたい。

尚、本発表は、主に 2002 年 9 月から 2004 年 1 月にかけての約 1 年 5 ヶ月にわたる上海でのフィールドワークで得たデータや観察に基づくものである。

（問題意識）

社会主義中国における宗教政策⇒①政府の管理を受けることを前提に認可された教会（三自教会）と②非認可の教会（家の教会）あるいはグループ－両者は海外におけるメディア、人権団体、キリスト教団体、政治家などの形成するディスコースの中で明確に境界付けられ、固定的なイメージが付与されている。

（例）ワシントンポストのある記者－中国において市民社会が根づき始めている例として独立の映画製作者、地下教会、民間企業、反喫煙グループ、女性援助グループなどを挙げた。（Madsen, 1998）

↑

（問い）地下教会（非公認教会）と公認教会である三自教会とをことさらに分けて、とりわけ一方のみを「市民社会」として強調していること－このような発言や、中国政府の宗教政策を人権侵害として批判するディスコースは信仰の自由や市民社会といった価値を一方的に中国社会に適応することによって、中国プロテスタントの状況について、より多元的な側面があるという点を覆い隠してしまう。⇒抑圧や政府の支配権力といった要素ではなく他の要素－すなわち空間－に焦点を当てることによって以下の二つの状況を強調する。

①三自教会、家の教会それぞれの空間的特性から考察すると、教会堂というオープンに宗教活動を行える空間を持つことが可能な三自教会は、その空間的特性ゆえに「市民社会」的な要素や可能性を時には家の教会以上に獲得することも可能である。

②両教会の特徴は政治的立場よりも、それぞれが所有する宗教空間の特性と、その間の信徒の行き来の状況を見ると、三自教会、地下教会というカテゴリーの間の境界はもっと柔軟なもので、それが政府もコントロールしきれない新たな宗教空間を生み出しつつある。

（宗教空間）

本発表で言う「宗教空間」＝宗教儀礼研究が対象とするような、一時的に世俗から切り離される凝集された空間のみではなく、教会や集会場所などの場所－すなわち宗教と関わる物質的な空間を主に示す。また、空間と関係する人々、活動、行為および他の空間との関係性。

＊足羽の定義する宗教空間：「宗教に関する実践的活動のネットワークの広がりと活動内容、国家が支配する制度や法律における宗教の配置空間、宗教のイデオロギーとコスモロジカルな想像力が押し広げ包摂する空間、そのほか経済や教育から自然保護まで、宗教が主体的に関連していく領域の、物理的、制度的、意味的総合空間」（足羽　2003）

本発表での宗教空間－国家や宗教リーダー達のイニシアチブで近代化という明確な意図に基づいて形成された空間よりも、物質的な空間、すなわち一般の信者達が日常において認識し、活動の場としている空間に焦点を当てる。⇒政治体制が設定する空間を越え、多様で柔軟な空間を形成する可能性を含む現在の動きを浮かび上がらせる。

市民社会論－本発表での宗教空間その輪郭をより明確にすることができる。しかし公共空間などの他の社会的・政治的空間と同一のタームと枠組のみでは宗教空間を論じるのに十分ではなく－宗教の持つ社会組織としての面をクローズアップする一方で、信仰、すなわち特定の建物や部屋を宗教的空間として意味を与える力を軽視すべきではない。

Feuchtwang：「中国における信仰のあり方を、十分に理論的に位置づけを必要がある。」（Feuchtwang, 2003）

しかし、今回の発表ではその領域については時間の都合上最後に簡単に述べるにとどめ、宗教空間がむしろ社会的環境の中でいかなる要素を備え、そして発展的可能性を得、中国プロテスタントの宗教活動、信仰にいかなる新たな方向性を付け加えるかを問う。

２．中国プロテスタントをめぐる歴史

２－１．近代から 1949 年まで

・西洋モダニティ－キリスト教が創出した空間－は最も広く中国人に開かれていた西洋的空間。教会のほとんどは欧米からのミッショナリーが運営。

・1920 年代－民族主義の高まりと反帝国主義、反キリスト教主義

＊中国人による教会形成－①民族主義、②反モダニティ

２－２．中華人民共和国建国以降の宗教政策と中国プロテスタント

２－２－１．毛沢東時代

・憲法上は「宗教信仰の自由」が認められるが、政府当局による制限とコントロール。中国には仏教、道教、イスラム教、プロテスタント、カトリックの 5 つが政府の認める宗教のカテゴリーに入り、それら各宗教は政府の指導下にある宗教協会を組織。すべての宗教組織、活動、メンバーはその協会に属し、協会を通して政府の指導と管理を受ける。協会に属さない場合は違法となり取締りの対象となる。

プロテスタント－中国基督教三自愛国運動委員会に属する教会－「三自教会（Three-self church）」それ以外の教会－非合法として弾圧や取締りを受ける。「家庭教会（Houce church）」、あるいは「地下教会（Underground church）」。

・「西洋帝国主義」との絶縁がキリスト教徒の課題－1951 年から文革終了まで海外教会との関わりが途絶える。

・1958 年：宗派統合、空間の節約という名目で多くの教会が閉鎖⇒宗派の統合。

・文化大革命（1966－1976）宗教活動は完全に停止。教会は閉鎖され、宗教空間を失った信者達の多くは私的空間において極秘に礼拝を行う（「地下化」）。この間に信者、特に福音派が増加。

２－２－２．改革・開放時代以降

・1978 年：緩和された宗教政策が制定される。（海外との交流は制限付で再開。）

・宗教活動の再開⇒1980 年前後に教会の敷地、建物が返還され礼拝が再開。

・1980 年代以降他の宗教と同様にキリスト教も信者の増加現象（ブーム）。現在も継続。
・1994 年：「中华人民共和国境内外国人宗教活动管理规定」制定－外国人の宗教活動への制限
・1996 年前後：地下教会への締め付け。

３．公認教会（三自教会）と非公認教会（家庭教会）というカテゴリー
中国政府による宗教活動へのコントロールや規制の状況は、しばしば海外においてキリスト教団体、人権擁護団体、メディアなどにおいて問題として取り上げられる。－信仰を政治に従属させる三自教会と政治的圧力に屈せず真の信仰を守る家の教会という構図。家庭教会への賛美的形容詞－「英雄的」「敬虔的」「民主的」－これらは部分的な理解であり、三自教会対しても同様。
　政教分離、信仰の自由を宗教の本質と位置づける西洋の宗教観そのものを体現したものとして中国に入ってきたプロテスタント－教会が政府の管理を受け入れられるか否か⇒中国には三自教会と家の教会という二種類の教会のカテゴリー。
　両者は政治的位置づけのみでなく、宗教活動を行う空間としても互いに異なる特性を多々備えるが、海外からの偏った、固定的なイメージと区分は、両者は相補的でもあるという中国人プロテスタントの認識と一致するものではない。「三自教会と HC は中国プロテスタントという一つの身体の両足」。

４．上海のプロテスタント教会－空間からの考察
４－１．教会－キリスト教の宗教空間の特徴
church：①特定の礼拝場所、制度、メンバーシップを持つ信仰者の集団。②個々の教会を越えた普遍的な存在としての教会、③礼拝の場所としての場所、建築物（中国語：「教堂」）。
（特徴）
定期性：少なくとも洗礼を受けた特定のメンバーが、週に 1 回は集まり礼拝を持つことができる空間として教会を必要とする。教会での礼拝＝キリスト教徒にとって重要であり、個人的実践するのではなく、特定の場所に複数集まって礼拝を行うことが義務でもある。
固定的空間：「神の家」としての教会。信仰の対象[1]。信者がいる限り、空間を確保し、神の家である教会堂を建てることは、必要不可欠。
明確なメンバーシップ：信仰告白をした受洗者を中心とした明確なメンバーシップ。
非空間性：神の没時空間性－教会以外のいかなる空間でも礼拝や祈りは可能かつ重要。

＊教会は重要だが、どこでも神を賛美できる。神の家としての教会を確保すべきだが、神は空間を越えて遍在するという相反する教理⇒三自教会、家の教会のそれぞれのあり方や相互の関係に反映。

４－２．上海におけるキリスト教の宗教空間－①三自教会、②家の教会、③外国人の空間、④台湾と中国の合同教会、⑤インターネットの空間

（諸空間の特徴の背景となる上海の情況）
＊上海の歴史－西洋からのモダニティによって漁村から国際都市として発展。多くの近代的空間の形成－キリスト教会はモダニティを備えた宗教空間として現れる。**（現在）**上海という土地に刻印された歴史の、資本を引き寄せるもの国際都市上海のイメージの一部としての呼び起こしと再構築。その中での教会堂やキリスト教の位置づけ
＊決められた宗教活動場所（宗教施設）以外での宗教活動の禁止－公認と非公認の空間の区別と共

[1] キリスト教の信仰内容を示した『使徒信条』からの抜粋。「我は、天地の創造主、全能の父なる神を信ず。我は、その独子、我らの主イエス・キリストを信ず。（中略）我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交り、罪の赦し、体の復活、永遠の生命を信ず。」

に、宗教空間と非宗教空間の明確な区別。
＊空間の不足⇒プロテスタントに与えられた宗教空間の不足。拡大には政府の許可が必要。
＊私的空間の増加－賃貸アパート、私有財産としての住居の増加と一般化。
＊改革・開放による多様な空間の出現－商業的空間、外国人の空間。

４－３．各空間の特徴
①三自教会
（1）空間の不足－信者数の増加（上海市－16 万人）の一方で教会堂の増加は非常に遅い。⇒空間の不足を、時間の延長、すなわち礼拝を数回に分けることでカバー。
（国際礼拝堂の例）
⇒礼拝堂以外の場所（別館、庭）で礼拝に参加。拡声器、テレビモニター完備。
⇒４ヶ所の集会所での礼拝そのうちの一つはセブンスデー・アドベンチスト[2]の慣習を継承。
⇒副堂建設の強い希望－宗教空間獲得への強い欲求。

（2）可視性
・政府に対する可視性と同時に、社会や一般の人々に対する可視性。キリスト教に典型的な宗教空間を備えるゆえに多くの人々にとってのキリスト教への入り口となる。

（3）毎回の礼拝参加者の多さと増え続ける信徒
・参加者、信者の把握が困難－「誰が失われてしまったかわからない」
・教会員全員が教会に対して責任を果たす必要がなく礼拝に参加のみの人々の多さ。⇒「三自教会」に属しているという意識は薄い。
・管理の難しさ
・収容人数の限界と福音を多くの人に広めるという使命の間のジレンマ－未解決。

（4）三自教会という空間に投影されるキリスト教のイメージ
・外国伝道団によって建てられた典型的な西洋建築である教会堂を使用
一般信者－クリスマス、結婚式などが象徴する西洋性、トレンド性。
家の教会信者－典型的なキリスト教のシンボル、雰囲気を備えた場所。
（クリスマス）
・商業的イベントとしてのクリスマスの浸透[3]⇒「ロマンチックな雰囲気」を求めにイブの礼拝に大量の人が訪れる。（国際礼拝堂：一晩に 6000 人参加）
（結婚式）
・メディアで見るキリスト教式結婚式への憧れと需要の高まり⇒教会での結婚式には少なくとも片方が信者でなければならないという制限があるため、2003 年に上海で初めて結婚式のための、偽牧師を用意した模擬礼拝堂がオープン（どちらも日本企業による）。
＊その政治性、政府からのコントロールといった実情はほとんどイメージには投影されていない。

②家の教会－「家庭聚会（家庭集会）」と呼ばれる。
（分類）－①中国に解放以前にあった中国人を創設者とする多分に中国文化的特色を帯びた教会

---

[2] 1830 年代にアメリカで始まり、キリストの再臨を強調する。土曜日を安息日として礼拝を行い、信者同士で互いに足を洗い合う洗足という慣習を持つ。また、十分の一献金を熱心に行う。

[3] 2002 年のクリスマスイブには、送信された携帯メール数が史上最高となったという。（新華網　12 月 26 日）

②文革後ひそかに来華している外国伝道者（香港、台湾、韓国も多い）による教会。
③政府公認となることを否定してはいないが、教会が遠すぎる、政府からの認可が下りないなどの理由で個人の家庭礼拝を行うグループ

（1）不可視性
活動場所、時間についての情報公開は全くない

（2）共産党体制以前からの宗教空間の特性の継承
家庭礼拝ー伝道団による多数の宗派に分かれ、近代化した西洋の教会に対する一つの反応として歴史的に派生してきたものであり、中国独自のキリスト教発展のプロセスの一つでもある。
（例）ある家の教会ー教会は一つの地域に一つだけで、各地域の教会はそれぞれ独立しているべきという独自の教会観を打ち立てた中国人伝道師ウォッチマン・ニーが 1922 年に中国で立ち上げた小群（Little Flock）を継承。その信者は文革以前から徹底的に弾圧を受けたが、復活。海外でも発展しており、中国国内の教会と交流あり。

（3）規模の小ささ
充実感と一体性がある。しかし組織化が不十分であることも多く、信仰の行過ぎた主張や金銭管理の不正や内部衝突が起こる場合もある[4]。
（4）宗教的装置、シンボルの欠如
教会堂へのあこがれークリスマスや結婚式には三自教会へ行く信者も。
（5）海外とリンクした空間
小さな部屋は海外のより大きな教会、グループとつながっている。しかし西洋の宗派の勢力争いに巻き込まれること、彼らの神学を押し付けられることには警戒感も。

③台湾と中国の合同教会ー台湾のある半導体製造を大きな規模で行っている企業の従業員企業のための教会。2004 年末には教会堂が完成する予定。三自愛国委員会に属し、三自教会に加えられ、と中国人信者も通える。
（背景）SMICー上海および中国農村部の学校建設への多額の資金援助。
ー中国の宗教政策に逆らわない
ー台湾人は「同胞」で外国人ではない。
浦東地区ー開発地区だが市中心部から離れている地域ーあまり目立たない。

④インターネット空間ー自由な議論
（例）大陸基督教論壇ー「官方三自教会論壇」と「家庭教会論壇」があり、中国のあるべき教会のあり方などについて議論ー両者とも、政治（世俗権力）に対する態度の違いがあっても信仰において互いに目指す方向は同じであるし、内容において大きな隔たりがあるわけではないという認識。

⑤外国人の空間ー外国人のための宗教空間の需要、拡大
・上海在住の外国人の急増ー2003 年ー10 万人⇒2007 年ー70 万人
・1994 年「中華人民共和国内における外国人の宗教活動規定」制定ー外国人の宗教活動に対する規制。「外国人は県レベル以上の人民政府宗教部門が認可した場所で外国人が参加する宗教活動を行うことができる」

[4] アメリカの大学生グループによって創始された宗教グループに属する家の教会でかつて受洗し、その後バハイ教と出会い家の教会を離れた女性へのインタビューから。

・**＜認可されている活動場所＞**毎週日曜日、国際礼拝堂でのみ礼拝（英語）を認可。しかし空間ｂの容量はますます不足傾向にある。
・**＜未認可の外国人教会＞**国ごとの教会－日本人教会、韓国人教会、台湾人教会など。活動場所を申請してもなかなか得られない。
・**＜中国人、外国人信者の共同グループ＞**個人の家での勉強会（cell group）－留学生グループ、英語教師やビジネスマンとして来たミッショナリーの勉強会、外国人主催の活動に中国人も参加するという形態。中国人の洗礼も行う。
（例）Student Fellowship－上海市内の大学で学ぶ留学生と彼らが誘った中国人学生の交流・勉強会－複数の空間の境界を越えた空間。
＜特徴＞上海で働く人の自宅などでゲーム、聖書研究、スピーチなど。週に 1 度夜に 2 時間ほど。毎回2～30 人が参加するため､活動場所となる空間は不足気味｡大人数が集まり讃美歌を歌うなど、隠れた活動という雰囲気はない。
参加する中国人－非信者､三自教会信者､家の教会信者と様々｡政府公認の神学校で学んだ神学生、家の教会の伝道者も来たが聖書研究において、特にその理解において大きな隔たりはなく、互いに異なる教会に属することを気にする様子はない。互いに「教会堂に（あるいは「～堂」という個々の三自教会の名称）に行っている」「家の集会に行っている」という場所を示す表現でそのことが語られ、それ以上の含意はない。

（まとめ－上海の宗教空間の状況）
＊空間の確保－キリスト教は特定の空間を必要とし、空間の確保が懸案に。確保ができなければ、未登録の教会が増加する可能性もあるが、三自教会であっても、政府にとっては増えすぎるのはその可視性ゆえに好ましくない。上海におけるプロテスタントの状況は空間の確保という課題をめぐって大きく決定付けられている。
＊越えられる境界－三自教会員と家の教会員の互いの越境は多い⇒互いの信仰を評価。
＊外国人との交流の一般化－外国人信者、異なる教会に属する信者が交流する空間が提供される。
＊空間拡大と多様化－宗教空間の多層化と新たな創出
・ある大学内の学生会館のレストランで行われた Student Fellowship での三自教会員と家の教会員の二人の女性の証し－「神の助けによって私たちは最近二人で住む部屋を見つけることができた。そこで私たち中国人信者は聖書研究などのために集まれることができる」⇒国家が制定する宗教空間とは全く異なる状況－①宗教空間以外において、②本来は明確にいるべき空間が分割されている外国人、三自教会員、家の教会員の混在する空間で表明された新たな宗教空間の創出（という出来事)。
＊私的空間の拡大⇒礼拝や集会のための私的空間の確保は容易かつ一般的に。
家の教会との類似のあり方：外国人信者の交流グループ、勉強会など。

５．最後に－空間をめぐって

社会主義中国の国家体制にとって、人が集まる場所というのは反体制的行動を生み出しうるものとして十分に注意すべき対象である。たとえ人々が愛国主義に駆られて集まっているとしても、それがいつ反体制運動へと転化するかわからないとして注意深い管理とコントロールを行うものである。従って、集団が集まれる規模の空間を要求する集団にどのように空間を配分するかは重要な統治の技術であり、宗教管理においても同じである。特定の空間にその活動範囲を定め、定期的に政府の管理を受け入れることを条件に政府は宗教空間を与えてきた。そして三自教会は政府のその条件を受け入れることで､公的に活動できる空間を獲得している｡(家の教会のように隠れて参加しなければならないというのは望ましいことではないとして、公開性をもった宗教空間獲得のために三自教会に加わる選択をした老牧師の例)

その選択は神よりも政府の権威に従ったとして国内外のキリスト教信者の批判を浴びてきた。一方でその選択によって、キリスト教的シンボルを備えた空間、安定した宗教活動の場、制限はあっても全人民に可視的に開かれた神の家への門を手に入れた。消費主義やメディアを通してますます多くの非信者が抱くようになったキリスト教のイメージを備えているのは三自教会であり、それは家の教会員をも引き付ける。

しかしながら、三自教会であれ家の教会であれ、彼らの宗教空間は圧倒的に不足している。政府がより広く、柔軟に彼らに宗教空間を配分しないのであれば、宗教空間が政府の把握しにくい、現在広がりつつある私的空間に拡大することは自然のなりゆきであり、政府にとっては懸案である。また空間が得られないという不満は反政府の強力な下地になりうる[5]。

一方で上海などの大都市においては、個人が獲得できる居住空間の選択肢が増え、外国人の居住空間も自由に選べるようになったため、私的空間での宗教活動が以前よりも容易に、一般化しつつある。それは上海という都市空間の特徴として、自分達が宗教以外のフィールドでより多く経験できるようになった自由を、宗教空間にも押し広げようとする試みでもある。そのような宗教空間は信仰を同じくする者同士の交流と学びあいを求めて、三自教会と家の教会の信徒同士のそれぞれの宗教空間の境界を越えた交流の場を与え、新しい、多様な宗教空間の創出の可能性を示している。このように中国では政府が空間の設定、分類の権力を持つが、中国プロテスタント達は、他の国々においても宗教が世俗の権力とは異なる価値基準を持ち、空間的・時間的境界の設定を行ってきたのと同じように自らも自らのパースペクティブから境界設定を行っているのである。

相互に互いの空間は越えることが可能で、その制度的境界は信者にとっては無意味になりつつある。しかしこの二つのアクターによる境界設定のはざまで決着がついていない問題がある。それは信仰の本質に関わる問題で、三自教会を神は認めているのか？世俗の権力に従う三自教会に神はいるのか？という問題があり、三自教会、家の教会に不安を呼び起こし続けるであろう。

引用・参考文献

足羽與志子　2003 年　「モダニティと『宗教』の創出」『岩波講座　宗教１　宗教とはなにか』岩波書店

Feuchtwang, Stephan, 2003, *Popular Religion in China: The Imperial Metaphor.* RoutledgeCurzon

Kipnis, Andrew B. 2001 'The Flourishing of Religion in Post-Mao China and the Anthropological Category of Religion

Madsen, Richard, 1998 *China's Catholics : Tragedy and Hope in an Emerging Civil Society.* University of California Press

[5]例えば、西安市では、1999 年に、市中心の教会で大人数の集まりを持っていることに対して市政府が警告を出し、強制的に教会を郊外に移動させようとしたとき、西安市のプロテスタントは反政府の抗議を起こしたという事件があった（Kipnis 2000）。